

有田秀穂教授送別の辞

鈴木 郁子

東邦大学医学部生理学講座統合生理学分野講師

有田秀穂教授の退任に際しまして、東邦大学生理学教室統合生理学分野を代表してお礼の言葉を述べさせていただきます。

有田教授は、昭和48年東京大学医学部をご卒業され、東海大学医学部内科学第2講座にて、呼吸器内科学の診療および臨床研究に携わられました。昭和55年から米国ニューヨーク州立大学医学部生理学講座に助教授として招聘され、呼吸生理学、特に呼吸中枢の神経ネットワークの研究に従事されました。現在有田先生の広い机には色褪せた古い写真がたった1枚飾られています。その写真に写っておられる白髪の紳士がその当時の恩師のようです。この恩師の影響もあってその後基礎研究の道に進まれたのでしょうか。昭和59年には筑波大学基礎医学系生理学の講師として赴任され、米国で培われた考え方や技術を多くの学生に授けながら呼吸中枢に関する研究活動を発展されました。

平成2年に本学医学部生理学第1講座に助教授として着任され、平成8年からは同講座の教授を務められています(平成17年に生理学講座統合生理学分野に改名)。この間、呼吸中枢のリズムに関する研究、あくびやしゃっくりのメカニズムに関する研究、脳内セロトニン代謝と情動、感情、自律機能をはじめとする高次神経機能に関する研究を推進され、日本自律神経学会理事・評議員、日本適応医学会評議員、日本生理学会評議員をはじめとする学会役職を果たされてきました。教育面では、平成16年のカリキュラム改訂に際して、基礎系統合カリキュラム策定の中心的役割を果たされました。

現在有田教授はセロトニン研究の第一人者として知られ、多数の著書を著しています。また、全国各地で開かれる数多くの講演会等を通じて研究成果を社会に還元されています。全国各地をかばん1つで行脚する姿はフウテンの寅さんを彷彿させますが、少し違うところは翌日に講義等があるために、北海道でも沖縄でも日帰りですぐに帰って来られるところです。今後は講義がないので、たまにはゆっくりと温泉に浸かって、忙しい身体をもう少し大事にでき

るのではないのでしょうか。

ところで、有田教授の生み出された用語に「セロトニン呼吸法」というものがあります。JRの電車内や新聞の広告、テレビ等でご覧になった方も多いのではないでしょうか。セロトニン呼吸法というのは、座禅の呼吸法によって精神の安らぎを得る方法です。座禅の呼吸法は古来の昔より伝授されていますが、その詳しいメカニズムについては全く把握されていませんでした。先生は呼吸法によって脳内のセロトニン神経の活性化が起こることを発見されました。そしてにわかに、呼吸法のメカニズムが注目されるようになった訳です。

先生と呼吸法の出会いは40年以上前、先生がまだ大学生だった頃に遡るとお聞きしています。当時は大学紛争が激しく、1年間ばかり授業がなくなったそうです。そんなとき、先生はシュノーケリングとマスク、足ヒレをつけて日本中の海を潜っては放浪する、素潜りの旅に出られました。素潜りで1度に潜ってられる時間は2分程度、それを1日中繰り返していたある時、先生はふと気づかれたそうです。海の中の静かで特別な世界をのぞいていると、心が穏やかで安定し、何ともいえない幸福感で体と心が満たされているということに。この海での呼吸によって得られる安心感と幸福感が先生のご研究の出発点となったようです。

有田先生は素潜りの旅を終えられてから、大学で潜水クラブ(海洋研究会)も発足されました。当時は現代と違ってダイビングをする人が珍しい時代でしたから、先生の新しい道を切り開く能力はこの頃から既にあったのです。一方、サッカー部でもご活躍され、東日本医科学生総合体育大会(東医体)で準優勝されたと伺っています。また、20年ほど前にはスカッシュのシニア全国大会で入賞されました。わたしは有田先生と一緒に研究をして15年になりますが、風邪や病気でお休みされたことはたったの1回もありませんでした。というよりは風邪を引かれている姿を見たことがありません。

セロトニン神経は呼吸法のみならず、さまざまなリズム

性運動によっても活性化されます。このため、有田先生はさまざまな分野の方々との交流があります。教室には呼吸法や座禅に関わる僧侶の方々、ヨガやフラダンスの指導者、音楽家が数多く訪れます。多くの専門分野の方々が気軽に研究室を訪れるのは、まさに先生のご人徳というよりほか

ありません。

有田先生、長い間、東邦大学医学部のために多くのご尽力をいただきまして、本当にありがとうございました。今後もセロトニン研究および医療でますますご活躍されることをお祈り申し上げます。